

研究科内公募プロジェクト

道徳授業における話し合い活動の在り方

—教室談話に着目して—

代表 司城 紀代美 (教育心理学コースD3)

三輪 聡子 (教育心理学コースD1)

小野田 亮介 (教育心理学コースM1)

松村 英治 (教職開発コースM1)

指導教員 秋田 喜代美 (教育心理学コース 教授)

問題と目的

本研究の目的は、道徳授業で行われている話し合い活動に着目し、意識調査と教室談話の分析を通して話し合い活動での児童と教師の在り方に対して示唆を得ることである。近年、初等教育における話し合い活動への取り組みが重要視される(秋田、2000；高垣・中島、2004) 一方で、話し合い活動を授業に導入する困難さも指摘されている。困難さの問題の一つとして、話し合い活動の構造とそこに参加する学習者の参加スタイルとの関係性が挙げられる。本研究ではF.Erickson (1982) の課題構造と参加構造の理論に基づき、話し合い活動に求められる目的に児童がどのように沿いながら参加しているのかを検討する。

初等教育における道徳授業については榊原ら(2003) が他者との相互作用の中で道徳観を構成していくべきであると提唱している。本研究では導入、展開前段(資料を用いた話し合い)、展開後段(自分自身の生活との関連づけ)、終末という4つの場面から成る道徳の授業展開の中で行われる話し合い活動に着目する。道徳授業での話し合い活動は、「多様な価値観の共有」と「本時でねらいとする価値への到達」の2つの目的が、各場面において交互に重要視される独自の課題構造をもつ。教師は、多様な考えを外化していくことを児童に求める一方で、本時でねらいとする価値や道徳概念を児童に自覚させていく必要がある。言い換えるならば、道徳授業は2つの異なる目的の間を循環的に行き来しつつ展開される実践的活動である。道徳の話し合いにおいて特徴的である2つの異なる

目的間の行き来は、児童の具体的な生活経験やそこで生起する感情と、教師が獲得させたいと考える概念とが結びついていく過程であるといえる。この、具体と抽象を行き来する中で、抽象的な概念が内容を伴っていく過程がいかに関話し合い活動の中で成り立つのかを以下2つの研究で明らかにする。

【研究1】では、教師がどのように話し合い活動を構成しているのかを、各場面における教師の目的の違いに着目して検討する。質問紙で道徳授業における各場面の目的の違いを問い、場面ごとに差があるのかどうかを明らかにする。【研究2】では、研究1で示した枠組みの中で、実際の授業を対象に、教師の目的と児童の発話がどのように影響を与え合いながら話し合い活動が展開されるのかという過程を明らかにする。また、副読本を通じて扱われる概念や価値が個々の児童の具体的な経験や心情といかに関結びついているのかを詳細に検討する。

道徳授業における話し合い活動の目的の検討— 教師の意識面から—【研究1】

研究1では、教師を対象に質問紙調査を行い、道徳授業における話し合い活動の目的について明らかにした。その結果、以下2点が示された。

第一に、授業終盤に近づくにつれて、教師の意識は多様な意見を求める意識よりも、ねらいとする道徳的価値への到達を重んじる意識が高くなっていた。限られた授業時間内で価値到達を行ない

たいという意識と、話し合いの中で形成された道徳概念を児童に理解させたいという意識が、教師の中で自覚的に高まっていくのではないかと考えられる。第二に、教師は授業全体を通して児童に、個々が持つ多様な価値観を共有してほしいと考えていることが示された。展開前段においても教師は「多様な価値観の共有」を重視しており、到達してほしい価値や概念に関する資料を用意しながらも、個々の児童に多様な価値観や体験と結びつけながら資料の解釈を行ってほしいと考えているといえる。したがって、教師は「ねらいとする価値への到達」を可能とする活動の中で「多様な価値観の共有」を目的とし、そのような児童の参加を期待しながら、展開前段での話し合い活動を成り立たせていると考えられる。展開前段が副読本等の資料を使用している場面であることを踏まえると、教師は道徳授業の中で、資料に示されている道徳的価値を扱いながら、児童それぞれの価値観を学級全体で共有しようとしているといえる。

話し合い活動における道徳的価値と児童の経験との相互作用過程【研究2】

研究2では、道徳授業の中で、教師が授業で扱いたいと考える価値や概念と、個々の児童の経験に基づく多様な価値観とがどのように関係しているのかを教師と児童の言語的なやりとりから明らかにした。

談話分析では、Bruner (1990) の理論に基づいてナラティブに着目し、資料と自分とを関連つけた内容である「中間的モード」のトピックに関して、「行動判断」「心情理解」「予想推測」「教師の価値観提示」という4つの機能を抽出した。これらは、いずれも資料の内容に含まれる道徳的価値への到達と、児童の多様な価値観や心情の提示という両方の目的へと働きかけ、両者を調整する機能を果たしていることが示された。さらに、事例分析を行ったところ、「中間的モード」のトピックがどのようにあられ、どう機能を果たすかは、資料の内容やそこで扱われる道徳的価値の特徴と関係していることが明らかになった。授業で扱われる道徳的価値が児童にとって身近なテーマであ

る場合、資料の内容も児童が実際に経験しうるものや想像しやすいものとなっており、話し合いの中で資料の内容と具体的な経験が頻繁に行き来するものと考えられる。一方で、自分に置き換えて想像することが容易であるがために、児童がより具体的な状況を想定し資料の内容が多面的にとらえられ、教師が到達しようとする道徳的価値への道筋がより複雑になることも示された。これに対し、児童が日常生活の中で意識することが少ないテーマの場合、資料も児童の経験から離れたものであり、話し合いの中では資料と経験の行き来が少なくなるといえる。

資料と経験の行き来は、抽象的な思考と具体的な思考とを相互に関連させ深めながら、その児童の内面に道徳的概念が位置づくために必要な事柄であると考えられる。教師は、児童自身の経験とより近い内容の資料の場合に「中間的モード」を多用して資料と経験の行き来を活発化させようとし、また、児童自身も教師の発問を足掛かりとしながら両者の行き来を活発に行っているといえる。

総括

教師は道徳の話し合いにおいては、多様な価値観を共有することを全体的に重視しながら、最終的にねらいとなる道徳的価値へも向かっており、両者の調整が道徳の話し合いにおいては鍵になると考えられる。そのつなぎには資料の内容と児童の経験両方にかかわるような発話が重要であり、両者の行き来が、話し合いを通して「道徳的実践力」を育てることにつながるといえよう。

今後の課題として以下の2点が挙げられる。

まず、道徳の話し合いの目的に関する教師の意識にはいくつかのパターンがあることが推察され、そのパターンによる授業過程の違いを、教師と児童の相互作用に着目しながら詳細に検討することが必要である。

さらに、他の教科においても教師が獲得させたいと考えている概念と、児童の経験に基づく具体的な事例が結びつけられて語られ、話し合いを通じて相互交渉を行いながら、その教科のねらいが達成されていくものと考えられる。本研究で示し

た視点を手がかりにさらに各教科の話し合い活動を分析することで、教科を通じた言語活動の在り方への提言が可能になるであろう。

引用文献

- 秋田喜代美 (2000). 子どもをはぐくむ授業づくり—知の創造へ. 岩波書店
- Bruner, J. (1990). *Acts of meaning*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Erickson, F. (1982). Classroom discourse as improvisation: Relationships between academic task structure and social participation structure in lessons. In L. C. Wilkinson (Ed.), *Communicating in the classroom*. New York: Academic Press. 153-181.
- 高垣マユミ・中島朋紀 (2004). 理科授業の協同学習における発話事例の解釈的分析, *教育心理学研究*, 52, 472-484.
- 榊原志保・徳永正直・堤正史・宮嶋秀光・林康成 (2003). *道徳教育論 対話による対話への教育* 東京: ナカニシ出版.